朝鮮通信による玄界灘藍島の風景評価の特徴

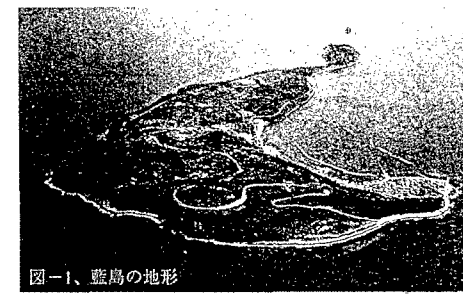
九州工業大学大学院　正　員　西島啓一郎
九州工業大学工学部　正　員　仲間浩一

1、はじめに

本研究は、風景を見つめる主体が動態的な状況下において、初めて見る風景に対峙したとき、主体の内面に意味的な価値付けが行われるきっかけとなったモデルの発見の構図に着目する。朝鮮通信使による風景生成は、主体の内面に意味付けされたモデルによって、発見→展開→確信と段階的に行われた[1]。また、風景生成が確信された地点での主体と対象景の間には、特定の構図条件があったことが先行研究により確認されている[2]。本論では、歴代の朝鮮通信使の紀行文、具体的には1655年第6次通信使従事官南龍翼の『扶桑録』1711年第8次通信使副使任守幹の『東槎録』[4]、1719年第9次通信使製述官申維翰の『海游録』[5]、1764年第11次通信使正使趙厳の『海槎日記』[6]、をテキストにして、これらにあわされた藍島の風景描写と、現在の藍島の景観を比較調査することにより、主体の意識の状態や、風景生成の発見の基盤となったモデルの構図上の条件について、検証・整理することを目的とする。

2、藍島（相島）の地形景観

相島は、新宮港より海上7.3 kmの沖合の玄界灘に浮かぶ周囲6.14 km、面積1.25 km²の小島である。島の地形は、北西部が膨らみ、南部はへこみ、東西に細長い三日月形をしている（図－1参照）。標高は40～77m、起伏の緩やかな台地が開け玄界灘が一望でき、海を隔てて北部九州沿岸がひろがる（図－2参照）。島の西端部には、通信使が西山と呼んだ通称高山があり、島では標高が最も高く、往時異国船を見張るための遠見番所が建てられていた。島の凸側は、300 m にわたり柱状節理の玄武岩がそそり立つ絶壁で崖下の崩落した岩塊に玄界灘の荒波が打ち寄せる。反対の凹側は、島中央部の台地から海岸に向けて緩やかな傾斜になり、港口はやや開けた平地になっている。そこに家屋が密集して集落を形成している。冬季の強い季節風は背後の山が遮るため、船舶を係留するのに都合がよく、昔から天然の良港として利用されている。


図－1、藍島の地形

3、藍島での朝鮮通信使

壱岐を出港した通信使一行は、海路藍島へ向った。藍島での接待は筑前黒田藩の役であった。客館の有待邸は、通信使の来訪ごとに修復や新たなしつらえが行なわれた。現在、相島中央の玄界灘を見下ろす高台に『史跡有待邸』と刻まれた石碑がある[7]。この場所は、大波止から直線距離にして約 1000m 。実際に山坂を通って行けば1500mほどあり、大波止の先から三使木屋まで敷いた筵や薄緑の数と合致しない[8]。図－3は、1748年第10次通信使の画家季聖麟が描いた絵巻物『槎路勝区図』の中の藍島図[9]である。ここには客館が島の南西の波止場近くに描かれてある。また、1995年の新宮町による発掘調査では、藍島図に描かれた位置において、建築跡の配石遺構や井戸が確認されている[10]。これらのことにより、有待邸の位置は島南西部の港口付近であったと推察される。

往路における通信使の藍島での逗留は、天候による海路の安全を確保するため、他の寄宿地と比べて長く、第6次、第8次、第9次は9日、第11次は23日に及んでいる。その間通信使は、小さな島内を隈無く散策し、風景を観賞している。

図－2、対岸の山並み

図－3、藍島図

表－１ 朝鮮通信使の藍島の風景評価のまとめ

1655年第６次通信使従事官南龍翼による『扶桑録』	東には石門が有って虹のようで南方の穴へ通じていた。博多津が有るが或いは覇家台とも称する。白沙青松が数里にわたって連なっていた。
1711年第８次通信使副使任守幹による『東槎録』	望見すると筑前州の大きな山が見え、西方から東方へ回って赤間関まで及んでいると言う。一帯は平沙が数里にわたって横に連なって、広く狭い前の干潟は殆ど二里にもなっていて視野が開けて地形もまた美しく、筑前州の府との距離が八・九里となっていて博多州とよびもする。
1719年第９次通信使製述官申維翰による『海游録』	上には青山があって三面をとりまくこと半月の如く、そのまん中には広くゆったりと水をたたえ、民田と屋舎は俯して海に臨む。海の外には遥かなる山が湾曲して控えること百里ばかり、その間に平湖、円鏡を作る。草木や雲烟はすべて爽郎にして幽楚。観る者はたちまちにして恍然として我を忘れる。すなわち、余が航海して以来、初めて見る神仙境である。
1764年代11次通信使正使趙厳による『海槎日記』	海を渡って以後実におもしろい情がなかったが、今日になって初めて快闊な事を得た。山の形状が曲がりくねり、南から東え赤間関まで殆ど五・六十里になり其の間にまた州郡が幾つかになり名勝地が幾つになるか分からぬ。四方周囲が数百里を遥かに越え、日本の地方を未だ詳しくは分からぬが、遠望してはっきりと通じていることは、此の地よりも勝れた所がないようだ。

４、朝鮮通信使による藍島の風景評価

歴代の朝鮮通信使一行は、釜山を旅立ち対馬・壱岐を経て、海路30日から40日後に藍島に至っている。それぞれの紀行文の風景記述は、それまでの行程では、自然地形や樹木、館舎となった建物や集落の民家の様子などを客観的に描写することが多く、風景を見つめる主体の内面には、特定の意味づけは行われていない。しかし、藍島に至って俄かに風景生成の描写があらわれる。第９次の申維翰は、「余が航海して以来、初めて見る神仙鏡である。」、第11次の趙厳は、「今日になって初めて快闊な事を得た。」と記している（表－１参照)。評価される対象景は、藍島の景観と、対岸に拡がる筑前州の景観である。藍島の景観は、通信使来訪のため新たにしつらえられた館舎や瀟酒にととのえられた民家と垣根や草木などを記した近距離景[11]。松林の様子を記した中距離景[12]。北風を防ぎ南に傾斜して港をつつむ島の地形を記した遠距離景[12]、の風景描写がある[13]。これらの観賞は通信使が藍島滞在中に島全体を散策して行われ、藍島の自然地理的ストラクチャーと風景要素の透視的輪郭像が表現されている。対岸の景観は、藍島から南方に向い見て、数キロにわたって続く白沙青松[14]とその背景にある山の輪郭、そして前景に拡がる海の美しさを評価している。図－３の中にも、方位関係は異なるが、藍島をとり囲むように対岸の浜や松林、山の風景が描かれている。

また申維維翰は、藍島の自然地理的ストラクチャーと風景要素の透視的輪郭像を心象のなかで把握した上、対岸の地と自分が立っている地を意識の中で逆転させ、島の景観を外からの眼差しで眺める意識をもったと考えられる[15]。

５、まとめ

以下ににおいて、朝鮮通信使の藍島の風景評価の特徴をまとめ、図－４に風景生成のモデルの構図を示す。

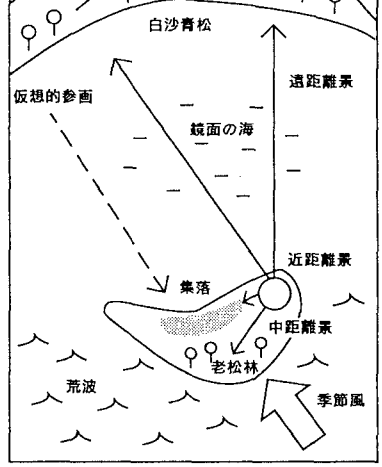
１）通信使が評価した藍島の景観の自然地理的ストラクチャーと風景要素の透視的輪郭像には次の特徴がある。

a 藍島は、外海の荒波の中に浮かぶ北側に凸のブーメラン型の小島で、北側から強い季節風が切り立った壁に吹きつけられている。

b 島の地形は、小高い台地になっており、老松林が拡がっている。北面の崖には、荒波が押し寄せるが、南側は緩やかな傾斜が港を囲み、湾になった港から対岸に渡る海は比較的緩やかである。

c 港付近には、瀟酒な民家と新しくしつらえた館舎があり、対岸の景観を一望できる。対岸には、白沙青松が拡がり、背景に山の輪郭線が連なる。

２）第９次の申維翰は、１）の事柄を心象の中で把握した上で、藍島の風景への仮想的参画を行っている。



図－４、藍島での風景生成構図モデル

注及び参考・引用文献

１）西嶋啓一郎：江戸時代の朝鮮通信使による風景認識と体験記述の特徴に関する研究、日本造園学会誌62(5)、pp673-676、1999. ２）西嶋啓一郎：江戸時代の朝鮮通信使による瀬戸内海鞆浦・牛窓における風景評価の特徴に関する研究、土木計画学講演集22、pp315-318、1999. ３）南龍翼、若松實訳：扶桑録、日朝協会愛知県連合会、1991. ４）任守幹、若松實訳：東槎録、日朝協会愛知県連合会、1993. ５）申維翰、姜存彦訳：海游録、東洋文庫、1975. ６）趙厳、若松實訳：海槎日記、日朝協会愛知県連合会、1995. ７）相島では昔から「通信使の客館は島中央北寄りの台地にあり、『有待邸』といわれていた」と伝えられてきた。８）新宮町誌編集委員会：新宮町誌、新宮町、pp896、1997. ９）藍島図、1748年、韓国国立中央博物館所蔵、掲載した図は８）より転載。10）前掲書８）、pp906-907、11）前掲書５）、pp74、12）前掲書５）、pp75、13）距離景に関しては、樋口忠彦：景観の構造、技報堂出版、pp19-27、1975. を参照。14）篠原修編：景観用語辞典、pp276-277、1998. 15）前掲書１）、pp676、